

こんにちは。

今回は金沢にお招きいただきまして、心よりお礼申し上げます。

私の美術館がこちらの美術館と提携させて頂いていることは大変な栄誉です。私の美術館のスタッフから、こちらのスタッフの皆様、秋元さんとスタッフの皆様、よろしくお伝えするようにと言われてきました。

教育の場としての美術館の現状についてお話をさせて頂くわけですが、秋元館長のお話には、心より賛同します。現在の美術館というものを考える上で、我々の使命や特殊な状況、資源、そして目的など、そうした要素などについて話す必要があります。では、特に教育に関して我々がどういった活動をしているかについて掘り下げていく前に、まずは私どもの近代美術館について短く説明しておきましょう。

私どもは現在の美術館の建物より少しだけ長い歴史を持っています。今年で52年目になります。このスライドでご覧いただいている建物は、それほど古いものではありません。1998年に新築した建物ですから。ですが、場所そのものは1958年に我々が活動を始めた場所と同じです。スカンジナビア半島の島にあり、ストックホルム中心部に位置しています。元はスウェーデン海軍のあった島で、海軍の兵舎だった建物を美術館をオープンしました。小さな建物がいくつかあった状態です。

当時、すでにいくらかの美術作品のコレクションがあったのですが、コレクションが本格的に始まったのは、初代の館長のポントゥス・フルテンの時でした。皆様も彼の名前をお聞きになったことが、おありかもしれませんね。フルテンが館長に就任したのは、50年代のことでした。

私が特にフルテンの名前をあげたのは、

美術館というのは単なる存在物ではなく、人の手によってが生み出されるものだからです。館長も大切です、アーティストも大切です。スタッフも大切です、来てくださるお客様も大切です。

そこで、アーティストと申しましたので、私どものコレクションを少しだけ、手短かに説明させていただきます。コレクションなしでは、美術館とは呼べないからです。単なるアートホールになってしまいます。ただし、どちらもアートセンターではありえることです。来館者の方々にとっては、アートの場所には違いないですが、「美術館」であるためには、やはりコレクションが必要です。

先ほどポントゥス・フルテンという名前をあげましたが、彼は(私どもの美術館での活躍の後)、パリでも活動しました。ポンピドゥー・センターの、初代館長になったのです。このポンピドゥー・センターについても、後ほど短くその活動をお話させていただきます。

このポントゥス・フルテンがストックホルムで1950年代と60年代、そして70年代の初頭にかけて取り組んだのは、私どもの美術館をコレクションのある真のアートセンターに変貌させたことです。

初期のジャスパー・ジョーンズの絵画作品をご覧いただいています。これは、たまたま入手したものではありません。ポントゥス・フルテンは、多数のアーティストを知っていました。彼は、頻りに旅に出ていましたが、このことは重要な意味があります。40年から50年前のスウェーデンは、ある意味世界の僻地のような存在だったからです。そこで当時の美術館スタッフたちは、その頃のアートの中心地であったパリとニューヨークに主なつながりを求めたのです。

しかも、(私どもの美術館で登場したのは)

ジャスパー・ジョーンズだけではありません。アンディー・ウォーホルやその他のアーティストたちも、ヨーロッパでの最初の展覧会は、私どもの美術館で開催しました。ウォーホルの場合、1968年のことでした。

で、このコレクションという話題、そして美術館の基礎の部分については、後ほど手短かに再び取り上げます。

最初にご覧いただいたスライドは、現在の私どもの美術館です。建築家は、スペインのラファエル・モネオです。

そしてこれは、建築ではなくて、ご覧のとおりバスですね。実は、現在の館長であるラース・ニッティヴと私がこの美術館で仕事を始めた2001年のことでしたが、就任して8日後に、この新しい美術館を休館しなければいけなくなったのです。その理由は、建築のプロセスがあまりにも急ピッチに進んだことでした。1998年から2001年までは美術館として機能したのですが、その後、休館を余儀なくされました。休館は2年間におよび、この経験からも、美術館とは単なる建築物ではないということが、身にしみて分かりました。

確かに、優れた建物があれば、それは嬉しいことですが、美術館とはあくまでもそれが果たしている機能や表現していることが大切なのです。ということでその2年間は、私たちは言ってみれば放浪の美術館だったのです。それは大変な放浪でした。そのまま放浪の途で倒れて死んでしまうか、それとも努力をしてその放浪経験から積極的に何かを生み出すか、その選択を迫られるような状態でした。

そこで私どもはその経験から何かを作り出すことを選び、ストックホルム中心部で、言うなれば駐屯地を設立したのです。そして「居候美術

基調講演「21世紀の市民社会と美術館の役割」

アン＝ソフィ・ノーリング (ストックホルム近代美術館 副館長兼主任学芸員)

館」として、無数のプロジェクトを行いました。つまり、他のいろいろな施設を訪問し、言うなれば彼らのお世話になったのです。私どものコレクションの中から、各施設側が展示作品を選び、私どもの知識を結集してともに労した、というわけです。

さらに、かなり特殊なプロジェクトもやってみました。その一例が、今ご覧いただいているものです。スウェーデン中を巡る(アート)バスです。北の境界から南の端までめぐると、スウェーデンもなかなか広いものです。

この企画はまた、ティーンエージャーとともに何かを作り出したいと思うようになったきっかけでもありました。私どもの美術館では、各種のワークショップで子どもたちと共に創作をするという伝統があります。これは長年続けているもので、実に良い伝統、今も続いている伝統です。この、子どもたちとのワークショップについては、すでにならぬ経験を積んでおり、当然の活動と見なしていました。ですが私どもは、さらに新しいことをやってみたかったのです。そして、考えてみると、休館するまでティーンエージャーの来館がほとんどないことに気がついたのです。そこで、ティーンエージャーに働きかけることにしました。

これを受けて、私がプロジェクト2件を企画しました。そのための実験となったのが、この巡回バスでの展覧会というわけです。普通のバスではなく、かなり大型のものです。学校の1つのクラス全員がこのバスに入って、展示を見ることができるほどでした。

そして私は、その2件のプロジェクトを手がけました。1つはビデオやフィルムのコレクションの企画、そしてもう1つはアメリカのアンドレア・ジッテルというアーティストをフィーチャー

したものでした。このスライドも、その放浪時代のもので、ショッピング・モールでダンスのパフォーマンスを行ったときのものです。

美術館開館時には、現代ダンスやアート映画などは、上演する場所が他にありませんでした。

今では、そうした場所は多数あり、(ストックホルムの)都市は、実に活気づいています。一度ストックホルムにお越しくださいれば、ご自分の目でご覧いただけるはずですよ。そんな中で、今でも私どもは、ダンスや映画などの分野との関係を保っております。現在のアートというものは、こうした分野も含めて成り立っているからです。

この現状を1つの単語で表すことができませぬ。特にビジョンというものを考える時にこの単語を思い浮かべると良いでしょう。大変面白い言葉だと、私は思います。それは「拡大」という言葉です。

ポントゥス・フルテンの時代と比べれば、アートの地理的な世界そのものも拡大しました。彼の時代には、芸術の場といえばアメリカとフランスのことでした。今では、全世界へと拡大しています。

技法や素材という点でも、拡大が続いています。以前には、アートといえば彫刻や絵画などのことでした。今やアートとは、たとえば美術館の中でアートと呼ばれるものは、何でもアートなのです。それについても、後ほどまた話をさせていただきます。

このスライドも、私どものコレクションからです。これは、ロバート・ラウシェンバーグの有名な《モノグラム》という作品です。「やぎ」という通称でも知られていますね。

この「やぎ」をストックホルム近代美術館が買い取ったのは、開館して間もない頃で、ラウシェンバーグが美術館で活動したときのことで、今ではこの作品は、私どものコレクション

に欠かせない一品になっています。これなしでは考えられない存在です。

(画面の)後ろのほうに、もう1つ作品がご覧になれると思います。これは、リー・ボンテューという女性アーティストの作品です。ポントゥス・フルテンは2006年に他界したのですが、生前彼になぜこのリー・ボンテューの作品を購入したのか、尋ねてみたことがあります。彼は、「なぜってリーがそこにいたから。」と答えました。とにかく、女性のアーティストですから、これも一種の「拡大」の形と言えるでしょう。

私どもが放浪を続けていた頃、(放浪が終わったら)コレクションをどうやって展示しようか、ということにも思案をめぐらせていました。コレクションといっても1つだけではなく、とにかく無数の展示方法があったのです。ですから、これにまつわる話はたくさんあります。我々は作品の貸出も行っていますが、その貸出の件数を見ると、そうですね、ざっとニューヨーク近代美術館やロンドンのテート・ギャラリーに並ぶ数の貸出を、毎年行っています。ですから、かなりの点数の作品は私どもの美術館の外に出ているわけです。

それだけのコレクションがあっても、まだ足りない大物があったのです。それは、女性アーティストたちによる作品です。そこで2004年に本拠地の(ストックホルム中心部にある)島に戻ると、「こうあってほしい美術館」というプロジェクトの第2弾を始めました。

ところで、美術館には資金不足という問題はずき物ですが、私どもの美術館の開館時にも、資金不足は悩みの種でした。そして当時、「こうあってほしい美術館」の第1弾がプロジェクトとしてあったのですが、このプロジェクトではポントゥス・フルテンが作品100点を手配し、文化担

当大臣に資金を要請しました。その資金があれば、世界でも最高の美術館を作る、と説明をしたのです。すると、なんと当時の貨幣価値で500,000ユーロの資金が拠出されたのです。これには、ポントゥス・フルテン自身も驚いていました。これにより先ほどの《やぎ》、別称《モノグラム》のような作品も取得することができ、中核となるコレクションが揃いました。

それから島に戻ると私どもは、新しいプロジェクトを始めるとともに、前回受けた額の10倍の資金を要請しました。これは、同質の女性アーティストの作品を購入するためでした。1960年代や70年代には、関係者はまだ男性アーティストを中心に考えており、女性アーティストの作品は購入していませんでした。その中でリー・ポンテカーは、例外的な存在だったのです。そして、文化担当大臣からは、私たちの予想に反し、ポントゥス・フルテンが支給された額すら得ることはできませんでした。

しかしながら民間からの寄付が潤沢に得られました。もちろん、大臣からもそれなりに支給はありました。女性の大臣だったのですが、我々の計画に対し、大変良い考えだと評価してくださいました。大臣として、この申請金額を見たときにはびっくりしたと彼女は言っていました。大変斬新で良いアイデアだと、言ってくださいました。申請金額の全額を拠出することはできない、と言われましたがね。しかし、民間からの寄付が集まりました。これは、スウェーデンでは珍しいことです。なにしろ、税金が高いですから。

現代アーティストの作品は男女ともにある程度収集できました。ですが、それでもまだ歴史上の重要作品を集めているという感覚でした。そこでこのプロジェクトを始め、新たな作品の

購入を行いました。作家名を、いくつか挙げてみましょう。

例えば、20世紀初頭のロシアのアバンギャルドアーティスト、ポポヴァ。ルイーザ・ブルジョワ。さらに、ドロセア・タニングとキャロリー・シュネーマン、その他数人。

このプロジェクトは大変、私どもには楽しいものでした。これにより、実際、コレクションというものへの見方が少し変わりました。そして（放浪を終えて）島に戻ったとき、やはりコレクションの展示を行いました。ただ、その展示方法が、普通ではなかったのです。我々は時系列を逆にしたのです。現代の作品から始まり、コレクションを展示した18の部屋を巡りながら時間を逆行していく、という展示方法でした。言葉ではこれは簡単なことに聞こえるでしょう？ 実際には、展示の配置換えを頻繁にしないといけません。特に現代の作品では、これを頻繁に行うことになりました。そういう面倒があっても、展覧会を開かないのならそもそも近現代アートの美術館なんて、何の意味があるでしょう？

ここで、主な展覧会から6つをお目につけましょう。加えて、小規模のプロジェクトもいくつか。

時代をさかのぼっていくと、まず私どもが最初に催した展覧会シリーズは、「近代美術館での第1日」というものでした。毎月の第1日に、必ず一人のアーティストあるいはアーティストのグループを招いて何かをやってもらうことにしたのです。1月1日だろうが5月1日だろうが、とにかく毎月の1日に必ず何かをするというものでした。これを3年間続けたのですが、さすがに私たちも飽きてきました。

そこで、その次のシリーズをはじめたのです。「近代美術館の今」というものです。これは、大変でした。この手の大掛かりな展覧会は通常、少なくとも3年間の企画期間を経て開催す

るものだからです。しかし、テンポよく続けていくためにも、私たちには何かをやらねば、というはっきりしたニーズや熱意がありました。

そして昨年、2009年、実は日本のアーティストのシリーズを始めました。彼女の名前は「束芋」です。正しく発音できていればいいのですが。

次に、このスライドは他の美術館と共催で行った展覧会の1つです。私たちはプロデュースする時もあれば、巡回展も時に行いますし、他の展覧会に参加することもありますし、また私たちだけでやることもあります。

この展覧会は、ポンピドゥー・センターも参加していたもので、「アフリカ・リミックス」というものです。このスライドの左のほうにご覧になれると思うのですが、ロンドンを拠点とするアフリカ人アーティスト、インカ・ショニバレの作品です。ここでこのアーティストの名前を挙げたのは、私どもが島に戻った際、建築にも少し手を入れることになったのですが、その時、建築家のラファエル・モネオの設計では、建物がなんともひどく堅い感じで、ある意味空虚な仕上がりでした。しかもロビーは、人が集まるといふ雰囲気がないものだったのです。そこでインカ・ショニバレが2箇所の入り口に手を加えることになりました。1つは上階の入り口、もう1つは海よりの入り口でした。

ただ、その時の改修は一時的なものだったので、現在ではバーバラ・クルーガーによる入り口になっています。

ここで、教育プログラムについては、また後でも具体的な話を致しますが、このスライドは「ゾーン・モデルナ」というものの一部です。いったいそれが何かということは少し説明いたします。そしてこれは、「ファッション」と

いう展覧会の関連でティーンエイジャーたちが行ったパフォーマンスのシーンです。このタイトルは一種の言葉遊びでして、「ファッション」と「ファッションネーション(魅惑)」とを組み合わせた言葉です。何か、あるいは誰かに魅惑されるというファッションですね。

ビジョンというものを考えることについては、先ほども少し話をしましたが、これは大切なことです。美術館というところで仕事をしていると、大変忙しい日々ですが、それでもちゃんとビジョンも考えないといけません。私どもには、あの放浪時代が物事を考えるための良いきっかけになりました。

先ほど、「拡大」というお話をしました。私どもにとって大切な言葉が、もう1つあります。「出会いの場所」というものです。

つまりは美術館は、来場者が、どのような目的で来られたにせよ、寛いでいただける場所でありたいということです。もちろん、それと同時に来られた方とアート作品の出会いの場であることも奨励して行きたいと思えます。

その展覧会からのスライドを、もう少し。これは、カリン・ママ・アンデルソンというスウェーデンのアーティストです。2〜3年前に催したある展覧会ですが、実は日本の美術評論家、松井みどりさんにカタログを執筆していただきました。出会いの場所という話をしましたが、これは一種のイメージです。これもカリン・ママ・アンデルソンの展覧会からのスライドですが、鑑賞者の皆様の様子を撮ったものです。

美術館ではアンケート調査を行っているのですが、私はそれはいいことだと思っています。たとえば、このスライドだけをご覧になると、私どもの来館者はみんな中年女性でブロード・ヘアーの人たちばかりかと思ってしまう。

実際には、そんなことはありません。大まかに言って、来館者の50〜60%は、ストックホルムとその周辺からのみなさんです。残りは、日本も含め世界中からお見えになっています。

年間の総来館者数は60万人程度です。先ほどどうがったのですが、金沢の美術館も来館者数が大変多いですね。それは大変素晴らしいことです。ただ、我々はいつも来場者数を数えているわけではありません。とは言え、来館者数が多いということは、美術館でやっていることに意味があるということの、良い兆候と言えるでしょう。

このスライドはコレクションの一例で、頻繁に入れ替えているコレクションです。左側に、デンマークのタル・Rというアーティストの絵画があります。

ただ、私がここで作品以外にお見せしたいのは、景色です。どの部屋からでも景色が見えるわけではないのですが、この部屋からは外の景色が見えます。つまり、(作品と)屋外の美しい自然の間に、一種の競合が生じているわけです。本来、建築家はまったく窓を作ろうとしませんでした。彼が優れた建築家であることは、言うまでもありません。ただ、スウェーデンでも日本同様、やはり光が必要です。それに、作品を見るときには精神を集中させ、その後で外の景色を見ながら少しリラックスしてみた作品について考えるという、一種のリズムも必要なのです。このスライドの絵画は、先ほども申しましたように、デンマークの画家による絵画です。もっとも、私どもの美術館としては、スカンジナビア系のアートに関しては主にスウェーデンの作家のものを収集しており、ある意味それが私どもの主な役目でも考えています。

ですが、他の諸国の作品も無論、収集してお

ります。できるだけ目ざとく、早めに重要な作品を集めるよう努めています。

この点で、ドイツの一部の美術館とは異なっています。たとえば、我々は特定のアーティストの作品を多数集めるというはしていません。一アーティストの作品はせいぜい1〜2作品なのですが、それらは慎重に選ばれたものばかりです。例えば、ドナルド・ジャッドの最初の作品は、私どもが所蔵しています。その他にもそうした例はあるのですが、ここではあえて紹介しないでおきます。他のスライドをお見せしたいからです。

私どもが放浪していた間、美術館とは決して建物のことではないが、建物があれば便利だということが身にしみて分かりました。

昔の美術館が白い箱のようなものだったとすると、今は一種のブラックボックスが必要でしょう。

このスライドも、スウェーデンのアーティストの作品です。彼女の名前はミリアム・ベックシュトロムといいます。

この点で、先ほどスウェーデンのアートと申しましたが、昔ならスウェーデンのアートとはスウェーデンのものでした。しかし今では、国外で活動しているスウェーデンのアーティストも多数おります。その例の一人として、ミリアムはそのアーティストとしての生涯のほとんどを、国外で過ごしてきました。ですからコレクションを展示する際にも、これはスウェーデン作家の部屋、こちらがその他の諸国、といった配置はしません。

ただし、このスペースは使いようがないと思っていた場所にピッタリで、そこがこの作家専用のスペースになった、という作家はいます。クララ・リーデンという女性です。これは美術館は必ずアーティストを追っていかねばならないという実例ですね。

美術館というものがいつまで意味を持っていられるのか、いつまで有効でいられるのか、それを考える時代になっています。

我々にとってその出発点は、マルセル・デュシャンです。ピッツバーグに次いでデュシャンによる作品のコレクションとしては、実は私どもの美術館が世界最大級のコレクションを擁しています。そのデュシャンですが、「アートとは、見る人の視覚の中にある。見る人、つまりは来館者が作品をアートに変質させるのだ」と言っています。このスライドでご覧のようなアーティストとマルセル・デュシャンの間に、生きたつながりがある限りは、美術館には存在する意味があります。

また、私どもは、近代美術館であるとともに現代美術館なのですが、これは実に逆説的といえます。でもこれは良いことだと思います。歴史と現在の間には、いつの時代でも何らかの摩擦があるものですからね。歴史を意味のある、面白いものにするには、現代の視点を常を持っていないといけません。

では、話を進めましょう。このセミナーの本題とは何なのでしょう？美術館とはどのようなもので、教育同様、どのような形で現在の生活に関わり、役に立ち、あるいは面白いものになるのでしょうか？それに関する一般的な背景についてお話していきましょう。

生きている人物。ガイド。声。自分が関心のあることを熱意を持って他人に語る人の知識。こうした人たちがいなければ、私たちはやっていけません。プロジェクトがどれだけ先端技術を駆使しようとしても、あるいはどんなに超現実的で野心的なものであろうと、生きている人物との出会いこそが、根底にある大切な部分なのです。私は常にそう考えています。その出会いの

相手とは、アーティストかもしれませんし、教育者かもしれませんし、他の誰かかもしれません。

このスライドは我々の放浪時代のもので、これといった素晴らしいアート作品をあまり所蔵していなかった頃のもので、それでも展覧会は行いましたが、コレクションは限られたものでした。

また、必要があれば特殊な対応も行っています。たとえば、何かの感覚器官に障がいがある方々のためです。一例として、この女性は視覚障がいがあるのですが、私どもの美術館では視覚障がい者の方々のために、特殊なツアーを実施しております。

ここで注意しなければならないのは、個々の人は1つの集団だけに属しているわけではなく、いくつもの集団に属している、という現実です。アートを見る人たちの記憶に何かを残したければ、来館者というものが非常に大切な存在になります。

現在では、多くの美術館では当たり前のようになってきたことがあります。たとえば、展示室には解説パネルがあり、さらにオーディオ・ガイドがあり、その他あらゆるツールがそろっています。ですが、こうしたものすべては結局のところ、来館者が作品を本当に捉えるためのベストの環境を用意するというに尽きます。

本当に大切なことは、何度も良く見ることだと、私は考えております。そこには、予備知識が多ければ、より良く見ることができる、という考えもあるわけです。

さらに、スウェーデン南部にある私どもの新たな分館を手短にご覧いただきましょう。これも私どものコレクションを紹介し、美術館としての活動をするための新しい「ツール」の1つと言えます。これは、(スウェーデンの)マルメと

いう都市にあります。古くは工場だった建物で、さらにアート・ホールに改造されていました。

このスライドでご覧のとおり、《モノグラム》はしばらくこの別館に移していました。背景には、草間彌生の作品も見えますね。

(この別館は)クリスマス直前に閉館したところなのでまさに出来たてです。このスライドは、リュック・タイマンスというアーティストが自分の作品を設置しているシーンです。

そしてこのスライドは、プレオープニングのもので、この地域とマルメ市から出席するよう要請があったのです。そこで私どもには資金が欠乏していると申し上げたところ、州の大臣から3者契約を結ぼうという提案がありました。そしてその3者契約を締結したのですが、やりたいことがすべてやれるだけの資金があるわけではありません。どこかで、資金を調達しなければいけないのです。アート作品を購入して展覧会を開催し、さらに州やその他の税金から受ける資金で、建物の賃料とスタッフの給料をまかなっている状態です。しかし、その他一切の費用は、自分たちで稼がないといけません。このため、他の組織の人たちと一緒に仕事をすることになり、大変関心を抱いています。

それから、教育という活動です。ストックホルムの建物の内部に、このような新しい場所を設けました。これが、学習ギャラリーです。これはロボットのように作動しまして、32枚のパネルを扱うことが出来ます。一種の機械ですね。ボタンを押すと、パネルが動き、下がってくるのです。こういう方法で、展示中でない作品も見ていただけるよう、努めているのです。そうでなければ収蔵庫で眠っているだけですからね。これもポントゥス・フルテンのアイデアでして、他界する前に建築家のレンゾ・ピアノとともにこのアイデアを思いつきました。これは、研究者には

良い部屋だと思えます。大学からお見えになる皆さんが、ある話題について非公式に突っ込んだ話し合いをなどをするのはうってつけです。

では、この学習ギャラリーから、今度はティーンエージャー向けのプロジェクトに移りましょう。これが、「ゾーン・モデルナ」と呼んでいる場所です。先ほど申しましたが、これはこれまで美術館に来なかった人たちに、どうすれば来てもらえるかという関心と努力から生まれたゾーンです。

子どもたちは、何であれ親や教師が連れてくれば、美術館に来ます。美術館に子どもたちがいるというのは、とても嬉しいものです。ですから私には昨日ここに多数の子どもたちがいたのは、大変嬉しい光景でした。あれほどの人数ではありませんが、私どもの美術館にも子どもたちはいます。もう何年もの間ずっと、子どもたちは何度も来館しているのでそこで子ども向けのワークショップを始めたのです。これはとても良いことで、子どもたちとティーンエージャーが衝突することはありません。

ただし、美術館での子どもの教育については、調査研究の必要があると考えています。子どもたちが美術館に来るとき、その目的の一つとして、美術館とはどんなところか、社会とはどんなものか、何かを見たり絵を描いたりすると、どういう良いことがあるのか、そういった事項に関してよいイメージを子どもたちに持つてもらうことが、私たちまた大人たちの課題だと信じておりますので、これは、実に良いことです。それに、色彩感覚やその他すべてに良い感覚を身につけてもらうこと。ただ、アートとはどういうものかという問題になりますと・・・これは別のレベルの問題で、大変複雑なものです。

そこで私を始めスタッフは、ストックホルムではティーンエージャーと一緒に作業するには

実に面白い集団だと考えるようになりました。人が自己を見つけアイデンティティに目覚める時期にアートというものは大変助けになるのです。

さてこの「ゾーン・モデルナ」というプロジェクトについてですが、それは、あるイメージの部分だけを見えるというものなんです。これは、たった今私どもが開催している展覧会なのですが、「ダリ・ダリ」という企画で、フランチェスコ・ヴェッツォーリをフィーチャーしています。

この企画の中心的な部分としてのダリの実像は、一般的なイメージを超えて、むしろウォーホルに近いという点があります。現代の作家ヴェッツォーリはまさしく、この問題を扱っています。この展覧会のケースでは、私もティーンエージャーたちと一緒に作業をしたのですが、彼らはロール・モデルとしてのこのアーティストに実に強い関心を抱いています。

そんなわけで、この「ゾーン・モデルナ」というプロジェクトのねらいは、アーティストをティーンエージャーの中から生み出そうというものではありません。それでも一部のティーンエージャーたちは、美術館にまた来てくれます。このプロジェクトは2004年に始めたもので、もう数年続いています。ティーンたちの一部は再度美術館に来てくれて、裏方のセミナーなどを始めています。その中には美術館でインターンをする子たちもいますし、もちろん一般の来館者としてまた来ている子たちもいます。

話を、ダリのプロジェクトに戻しましょう。たった今、私どものスタッフの一人がレストランから出てくるシーンを、ご覧いただきました。食事の用意を手伝っているところですね。そしてここにダリのプロジェクトに関わったグループがいます。毎日、ダリの料理本に従い、何かの料理を作っていたのです。これはパーティーの様

子。少しはにぎやかですが、グラスの中にはアルコールは入っていませんよ。

さらにワークショップの1つでは、実際に展覧会を開くこともできます。これがその入り口で、ここから入ります。このスライドでは、生徒たちの一人が独創性を出しているところでですね。そしてこれは、彼ら自身による展覧会のシーン。これはどういうやり方なのかというと、美術館はストックホルムとその近郊にあるいくつかの学校から生徒数名を招待するのです。ですから、プロジェクトごとに参加者はいろいろです。5つの学校からの生徒たちを混ぜます。想像できるでしょうが、このワークショップでの作業のために、生徒が時間を充てるよう校長先生や他の先生たちを説得するのは、大変な仕事です。参加する若者たち、ティーンエージャーたちは、まさしくより抜きの若者たちで、彼らを組み合わせさせて面白い良いチームを作ります。

このスライドは、別のプロジェクトですね。ビデオの展覧会のもので、「プレイ」というタイトルでした。新しくスウェーデンに移り住んで来た若者たちが暮らす場所から選び抜いた学生たちが集まったのですが、彼らはスウェーデン語をほとんど話せない若者たちです。つまり、人数と同じくらいの数の様々な言語が飛び交う中でコミュニケーションもいろいろなやり方とられていました。ですから、参加する生徒たちも覚悟を決めてかからないといけません。プロジェクトの開始時点では必ずしもスムーズにはいかないものですが、終わりごろには協力して参加できるようになっています。参加者の中には、自分の学校で問題を抱えた学生や、授業に出ていない学生もいます。それでもプロジェクトの終わるころにはうまくやっているの、失敗した例は一つもありません。今までに15回こ

のプロジェクトを実施しましたが、必ず参加者全員が取り組んでいます。ここでは学生たちは私たちと時間と過ごし、動き回ったり、できるだけ積極的に活動をするわけです。この「プレイ」の場合には、ここに4人の若者がいますが、一種のラップグループを結成し、新しいビデオを作りました。美術館での展覧会に出品してもよさそうですね。

こうしたプロジェクトからのスライドを、もう少しお見せします。これが、その1つ。アンディー・ウォーホル展のもので、彼のフィルムのみを使った展示です。ここにいるティーンエージャーたちは、それをもとに工場を作ることにしました。

彼らだけで行動しているわけではありません。エドゥケーター1名がいてチームをサポートしてくれます。加えて、そのプロジェクトのために選りすぐりのアーティストも必ず1名参加しています。学校の教師たちは活動そのものには参加しませんが、何が行われているかは把握しています。ワークショップの中には、教師たちはいません。自分の学校や、その他どこかにいます。ただ、ワークショップで何が行われているのかは、把握しています。この決まりによって、ティーンエージャーたちは言うてみれば、自由に活動できる場所を得られるわけです。教室での規則から自由になれるのですね。

若い人たちのアイデアというのは驚くものばかりです。先ほども申しましたように、参加する若者たちの多くは一種の落ちこぼれ組ですが、中には大変行儀の良い子たちもいます。でも最後には彼らはみんな何かを創り上げるんです。彼らはよく個人ではなく共同での作業を選びます。例えばこのスライドは、1950年代のロサンジェルスのアートにフォーカスしてみんなで作成した展覧会の時のものです。これは彼ら

が共同創作した彫刻です。なんだか美術館の中へとずんずんと入り込んでくるようなイメージです。

ロボットもあります。このスライドは、ワークショップ内のスペースの一角に展覧会を創り上げる作業の様子です。通常の展覧会と同じようにオープニングを開き、友達や家族をみんな招待しました。

ここ金沢で私も昨日見かけたのですが、子供たちやティーンエージャーというのは、自分の友人や家族を(展覧会などに)連れてくるものです。これは来館者を集めるという点でも効果的なやり方ですね。

そろそろ終わりに近づいてきました。最後に短いお話を2点紹介して、このレクチャーをまとめたいと思います。

これは、ティーンエージャーたちがあるデモンストレーションの用意をしているところです。このとき、私どもの美術館ではスウェーデンの具象のアーティスト、エオレ・ベルトリングの展覧会をやっていました。1960年代には、スウェーデンの社会もラジカルになった時期があり、ベルトリングも大きなポスターを掲げてメデーのデモに参加していました。そのポスターというのは、ピカソの《ゲルニカ》をフィーチャーした、いわばシンプルなものでした。これは、ベルトリングの作品をいろいろなバージョンにしたものを掲げ、ストックホルムの中心街に行進して行った時の様子です。

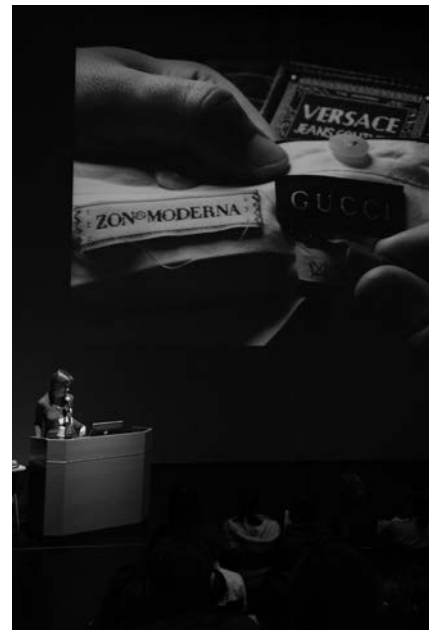
最後に紹介するプロジェクトは「ファッションション」からです。先ほど少し触れましたね。これはあるアーティストがグループと作業をしている様子ですが、この女性のアーティストは、実は後日私どもの美術館で働くことになり、現

在もエドゥケーターとしてこのプロジェクトに携わっています。この展覧会はアートとファッションに関するものなので、ティーンエージャーたちも自分たちのやり方で、こうした作業に取り組んでいます。

こうしたプロジェクトに参加したり、あるいは来館者として見に行ったりして、若い人が何かを作っていくうちに単に素敵なものからそれがだんだんアートと呼べるものになっていく様子を見ているのは大変面白いですよ。

このスライドもあるアイデアを形にしたものですが、来場者にいわゆるブランド物の衣服、GucciやKenzoなどを着て来てもらう、という企画画なのです

ここで最後のスライドを紹介しつつ私が申し上げたいのは、子供たちやティーンエージャー、



そして大人を対象にしたそれぞれの教育を行うには、摩擦が生じないようにすることが大切だという点です。同時に進めていっても、それぞれが別々のアプローチを取ると言うことです。

もちろん美術館にはそれぞれに伝統というものがありますから、それとどううまく調和をとっていくか、そしてどんな教育をしていくのかなど考えていかなければいけません。

たとえば、絵画見て、自分の目で見えたものを描いてみる、これもひとつの形です。あるいはアートを一種の道具のように見る、単なる物体として、鑑賞するようにはなくとるに足らないもののように見て、それについて語り、まるで壁を築くときの一種の建築素材のレンガを扱うようにとらえてみる、など。あるいは、あるアーティストのやることに、とにかくついていくというのも一つの手です。私どもにはそういった活動すべてのためのスペースがあります。これは本当に素晴らしいことだと思います。あれこれのプロジェクトそれぞれに力を入れることができるということです。

ではこのレクチャーを終わるにあたり、ご紹介したプロジェクトの一つに関わってきたあるアーティストの言葉を紹介しましょう。

読み上げますね。

「若い人々に囲まれた時のことだが、その時心を打たれたのは、彼らもみんな、悲嘆や苦痛を経験したことがあるのだ、ということだった。おそらく、そうした経験があったからこそ、我々はここで出会ったのだろう。ひょっとして、彼らは私とその解決策を編み出せるとでも思っていたのだろうか？ 私には分からない。とにかく、彼らの話に耳を傾けた。そして言えることは、若者たちの話から、私はある大切な事実を思い起こしたことだ。人はアート作品と出会うとき、

ある意味危険な賭けをしているということ。」

これこそ教育プログラムのすばらしい点だと思います。そして若い人たちも高齢の皆さんも交えた来館者の皆さんと何かに取り組むことで、新しい視点が得られるのです。必ず何か彼らから学ぶことがあるものです。

では、これで私の話を終わります。ありがとうございました。



アン＝ソフィ・ノーリング (Ann-Sofi Noring)
ストックホルム近代美術館副館長兼主任学芸員

1955年生まれ。スウェーデンで教育を受けた後、米国とフランスにてそれぞれ1年間語学と美術を学ぶ。1980年、ウプサラ大学にて美術と文学の学位を取得し、以降近現代美術に取り組む。1980-86年、ソルナ(ストックホルム北部)で2つのコミュニティギャラリーを運営し、市の美術品購入と美術教育の責任者を務めた。1991年までスウェーデンの巡回展覧会の学芸員として北欧諸国の巡回展を手掛ける。さらに国立公共美術協議会コミュニケーション部長としてオープン・スペースにおける美術に関する本の執筆・編集、セミナーや展覧会の企画に従事。2001年、ストックホルム近代美術館教育企画部長に就任、その後展覧会と収蔵作品の責任者となり、3年前より美術・教育部長。美術館で展覧会を担当した作家にアンドレア・ジッテル、アドリアン・パーチ、カルロス・ケープラン、カリン・ママ・アンダーソンらがいる。現在はエド・ルシェ、エヴァ・ロフダールやエイヤ＝リーサ・アハティラとともに将来のプロジェクトに取り組んでいる。